アピール文

精神科病棟に入院している人たちは、現在日本で約 32 万人といわれ、世界の病床数の 5 分の 1 を占めます。世界で最多です。退院できるのに、治療も受けずに入院している「社会的入院」と言われる人が 8 万人とも 10 万人とも言われ、国も地域移行を進めてきました。

ところが国は 2013 年秋に、地域移行に逆行する施策を打ち出しました。精神科病棟内の敷地に住む場所をつくる施策に対し、当事者中心に全国で反対の運動が広がりました。

それにも関わらず、昨年 7 月 1 日、厚生労働省が、精神科病棟を居住系施設に転換することを容認したのです。その検討委員会 25 名の委員に当事者はわずかに 2 名で、私たちの問題であるのに、当事者の反対の願いは施策に反映されませんでした。

昨年 1 月に日本も国連障害者権利条約を受け入れました。

権利条約第 19 条に「この条約の締約国は、障害のあるすべての人に対し、他の者と平等の選択の自由をもって地域社会で生活する平等の権利を認める」「障害のある人が、他の者との平等を基礎として、居住地及びどこで誰と生活するかを選択する機会を有すること、並びに特定の生活様式で生活するよう義務づけられないこと」とあります。

私たちは元々「どこに誰と住むか」を自分で選択できる大切な権利をもっています。

病院内の施設がいくら新しくても、外へ昼間出掛けられても、本当の自由はありません。

入院していた頃は、季節の移り変わりを感じなかったし、感じられなかった。

地域で暮らす今は、秋の風に吹かれて、山や木々の色が移り変わっていくのを肌で感じています。大きく息を吸うと、澄んだ秋の空が目に映ります。ぬかるんだ道でも自分の足で決めたところへ歩いて行けることに喜びを感じます。病院にいることに慣れて、何も感じられなくなっていった頃と比べ、今は「生きている」という実感があります。

会いたい時に会いたい人に会えたり手紙も出せる喜びがあります。

鍵がかけられることが無いので、好きな場所へも自由に行けるし、時には旅行や趣味も楽しめる幸せ。働いたり、好きな料理を食べたり、作ることもまた喜びです。

新しい人たちとの出会いがあって、自然や人と触れ合う喜びもあります。

自分の中から自然に豊かな感情が湧いてくることに驚きを感じるこがあります。

好きなことに熱中したり、自分の願いをかなえるために頑張ってみたりも出来ます。

お気に入りの洋服を選んで着たり、時には好きな香りで癒されたり、自分の好きな時に入浴してゆったりすることも幸せです。洗濯をして清潔な衣服を身につけることも出来ます。

落ち込んだ時には、家族や友人のことばと笑顔に癒されます。

「自分らしく生きていいのだ」と思え、誇りと自信と希望を取り戻すことが出来ます。

人と支え合いながら力をもらって営む生活は、感謝の念に堪えません。

私たちは障がいがあってもそんな風に、一人の人間として誇りをもって生きていきたい。

そのためにも、精神科病棟を住む場所として利用していくことに断固として反対します。

障がいがある人もない人も安心して暮らせる地域社会の実現のために、ここに集まった皆さんと共に力をあわせていくことを決意します。

2015 年 9 月 26 日

私たちも病院ではなく地域で暮らしたい　9・26 集会　in 長野　参加者一同